

白金蔭

11月号



Born2009

維新 1981



令和元年11月発行 第103号

定例会句会（毎月第三金曜日）

十二月二十日（金）正午～三時…当季雑詠五句

一月十七日（金）第三正午～三時…当季雑詠五句

二月二十一日（金）第五正午～三時…当季雑詠五句

十一月例会句会報（'19 / 11 / 15 7名欠3）

光成高志

団栗が闊歩の靴に蹴飛ばされ

冬麗や大嘗祭の話し聴く

郁子を喰ふといふといへども種磨き

冬満月潦のと照らし合ふ

ゑびす像鯛を抱へて冬ぬくし

佐藤宏之助

「悔命」を読む波郷忌の近ければ

時の鐘掲げばくるりと銀杏散る

かいつむり波郷はきようと啼きゐたり

改札を出れば落葉の並木道

初しぐれ誓子波津女の句碑濡らす

松村幸一

柿食ふや子規の齡を越えに越え

募りくるものに妻恋冬用意

在りし日の郭ぞめきの三の酉

湯さめしてドストエフスキーの虜

裏側は潔く無の熊手かな

光
みち

家の中覗く野良猫暮の秋

燈火親し汽車の文鎮置いてある

踏まれたか駅のホームのいぼむしり

甘藷の穴より蟻の出てきたる

落花生一株抜いて「持って行け」

田宮敦子

立冬や急いで家に帰る猫

リュック背負い新宿ブラリ小春かな

十一月座敷に入る日の光

花園神社屋台の隙間柿たわわ

救急車のサイレン響く今朝の冬

磯目健二

石路の一つぶ一つぶ黄がのぞく

武者昭七

柚子の実の光を吸ひて色づけり

山路越ゆ蜜柑畑を下に見て

秋の海房総半島沖遙か

秋日和柚子の実そつと顔を出す

宿の朝干物と蜜柑給ひけり

飯田孝三

石路の一輪残る庭の隅

増田陽一

初柿の艶の蒂尻ほめて買ふ

御代替りばなの賑ひ西の市

後肢にじり蟻蝨枯れきらず

菊晴れや目頭抑ふ旗の波

石路の黄の目に染みる一葉忌

武者正子

鶉来て夕雲の裾乱れたる

夢を境に寒夜の意識続くなり

大利根より野川に迷ひ鮭きたる

ベランダに落蟬残し冬に入る

林檎赤し中途半端に老いたれば

光成高志

こけももの実の色うれし小休止

五倍子で染めしスカーフ旧街道

きんかんの小さき色に小鳥の目

藤の実のはじけて耳の奥にまで

落花生一株抜いて「持って行け」

落花生畑の収穫を家族総出にてやっている畑の前で、俳句を作りに来ました、お邪魔しますがよろしいですかと云って畦に入って行く。色々話しを伺った後、帰ろう

みち

とした時、手前の落花生を一株抜いて、呉れてやる持つて行けと言われた瞬間を書いた俳句です。千葉の百姓はあげようと言うのを呉れてやるというのです。麻雀で点棒を払う時の悔しい捨て台詞、蓮根掘りの取材の時はやさしい言葉で貰ったこと、最近では野辺山のレタス畑など、また正美さんで行った蒟蒻畑など思い出されます。初しぐれ誓子波津女の句碑濡らす

宏之助

一読、猿蓑の芭蕉の発句「初しぐれ猿も小蓑をほしげ也」が浮かんだ。この元禄二年の芭蕉の前書きの「あつかりし夏も過ぎ、悲しかりし秋もくれて、山家に初冬をむかへて」は今和元年の今の今にそっくりの季感がある。初しぐれの美しい季語、それが誓子波津女の比翼句碑を静かに濡らしている。弟子の宏之助さんそれに私もこんな美観を持った句にはうれしさと哀感も湧いてきます。湯さめしてドストエフスキーの虜

幸一

湯冷めしても夢中で読んだドストエフスキーの罪と罰いや白痴。幸一さんもそうであったかと思った。私の十代の時も出家とその弟子と罪と罰は今からでも読みなさいと中二で言われたのを覚えているし、最近では東京外語大の学長さんがドストエフスキーを熱く語っていたのも覚えている。湯冷めの季語が合っているかどうかは中七の固有名詞が強すぎて気にならなくなる。

五倍子で染めしスカーフ旧街道

正子

五倍子とは、ヌルデの若葉に寄生したヌルデシロアブラムシの刺激によって、植物のタンニン酸が集中し、その部分が膨らんだもので、いわゆる虫こぶの一種です。五倍の大きさになるところからこの名があり附子ぶしともいいます。江戸時代、五倍子は附子鉄漿ぶしなといわれてお歯黒に用いられたほか薬品や染料として利用されてきた。鉄塩とか塩化クロムなど化学成分によって発色するので染め物に使う。それで染められたスカーフを旧街道で求められた回想の句でしょう。句会前茂田井宿の話しをしていたので、旧街道ここでは中山道の佇まいが蘇ってきてすぐ〇をつけました。

大利根より野川に迷ひ鮭きたる

陽一

手賀沼へ注ぐ大堀川で見た鮭でしょう。確か以前そういう句がありました。故哲也さんもこれを自慢にされていた。利根川より手賀沼に上りきて大堀川という野川に迷い来た鮭よと、鮭に呼びかけているやさしい心根が感じられます。私は木下街道を下って布佐に泊まった芭蕉が利根川を下った鹿島詣の貞享四年、時代を下って浅間山の大噴火で多くの死体や仏壇など流れて来た利根川を思い、また利根川図志の壮大な背景を思います。

一句鑑賞

磯目健二

家中覗く野良猫暮れの秋

みち

秋も深まり朝夕の冷え込みもきつくなつてくると、それまで放縦不羈に外を徘徊していた宿無し猫も暖かい人家が恋しいとみえて、門口や軒下に自然近づいてくる。犬は人に憑き猫は家に憑くという謂れが思い浮かぶ。

リュック背負い新宿フラーリ小春かな

敦子

戦前、兵士、学生、登山者などの背囊、たったリュックサック。戦後にそのリュック一つ背負つて世界中を気ままに旅行するバックパッカーが出現した。それがきっかけ軽便な旅行用品として一般に広まった。今やレディーさえ日常愛用する定番の洒落た生活用品になつている。穏やかな初冬の陽射しの中、天下の繁華街を屈託無く散策する女性。手にハンドバッグでなく、背にリュックであるところが、まさに今様なのである。

時の鐘撞けばくるりと银杏散る

宏之助

昔、時を告げる寺の鐘の音が町や村の上に流れた。芭蕉の「花の雲鐘は上野か浅草か」が描くのは駘蕩たる江戸の春だが、この句は鐘の音が冴えてくる晩秋の叙景である。撞木が鐘を打つ瞬間、くるりと黄葉一片が宙に舞い散る。鐘と落葉の阿吽の呼吸のような一瞬の景を言いてめて見事というほかない。

団栗が闊歩の靴に蹴飛ばされ

高志

路上に転がったか弱い団栗が威勢良くのし歩く男の革靴に跳ね飛ばされた。踏み潰ぶされずに済んだだけしかも知れぬ。蹴飛ばした男は、そんなこと気づきもしなかつたろう。世の傍若無人の強者と弱小の存在の対比をも連想させて面白い。

受贈誌（令和元年十一月号）

結願の寺の急坂白山茶花（東京クラブ11月号） 万世遊

岸壁の波音静か冬はじめ（〃） 文男

露の世や棚のこけしは年とらず（〃） 璃子

微笑みに胡桃供へて道祖神（〃） 栄

大綿の消えゆく日差しありにけり

深秋やオルゴール館のネジ回す（あふ十月号） 山尾かづひろ

山尾かづひろ吟行ノート十一月（修善寺温泉）

秋の昼足を浸して独鈷の湯 白石文男

十月の富士足柄の人と見る 光 みち

落鮎の川に釣人山に雲 光成高志

折鶴の嘴尖る秋思かな 飯田孝三

いちはやく風を知りたる櫛紅葉 山尾かづひろ

曼珠沙華町中流る桂川 長屋璃子

芭蕉のかるみ以後（57） 光成高志

野ざらし紀行から江戸に帰着した貞享三年から芭蕉の日々は非常に事多く雅席をこなしている。三月には鈴木清風発企の七吟歌仙、この歌仙に河合曾良が始めてその名を連ねている。曾良は諏訪生まれであるが、家督を弟に譲つて伊勢長島藩に仕え河合氏の養子となつて河合惣五郎と改名。長島の地が木曾川と長良川にはさまれた処であるのを以て曾良と号した。致仕して江戸へ出て深川草庵の近くに住んだので自然に俳諧に馴染み蕉門に入つた。後に奥の細道に同行し曾良日記を書き後世に名を残した。この年の春の古池の蕉風開眼の句を書かんとしてその頃の芭蕉の忙しさを付記しておきたい。彼岸の頃大垣藩主の戸田左門宛て書簡を読むと芭蕉の心がわかりやすく述べられているのでありがたい気がする。

さゝ浪や志賀のみやこはあれにしをむかしながらの山桜哉と、忠のり卿の詠じ給ひし哥の心をふまえて

花咲て七日鶴見るふもとかな

さてく哥の心とは格別、いやしき物に候、哥之雑口成とは尤二候、併我々が口には俳諧より外には出不申候、とかく明し暮したのしむ物、此雑口斗にて命を果し可申候。キ様などは哥道の方もよほどけいこ被成候故、折々は御詠草なども出可申候、とかく此方共は曾々其座へ参る候而、はじをかく事のみ口惜く候へ共、今更是非もな

き仕合、此方出會の中に一両輩哥好む有之候。又誹に成候而うつくしく過ぎ候而、誹言曾無是おもしろからず候。猶其内々、以上 ばせを 廿二日

左門様

こゝは平家物語の忠度都落の段を踏まえその忠度卿の詠じ給ひし哥の心をふまえ「花咲て七日鶴見るふもとかな」の清風宅での歌仙の発句を書いて所感を述べている。忠度卿の哥の心は格別なのですが、私の句などいやしきものです、こんな哥は雑言だよと云われれば尤もです。しかし我々が口には俳諧の他は出ませんので、ともかくも明けても暮れても楽しむ物、この雑言ばかりにて命を果すべきものと思つております。あなた様などは哥の道の方もよほど稽古なされたようですので、折々はお詠み集なども出されるべきでしょう。ともかくこちらは必ず其の座へ参りまして、はじをかく事のみ悔しく思うのですが、今更是非もなき仕儀にて、こちらの出会いの中に哥のお好きな方が二人居られます。又俳諧になるとうつくしすぎて、俳言がかつてなく面白いものではありません。猶その内その内、以上。以上のように候文を訳してみたら江戸詰め藩主にありのまま思いを書いてあると思ふ。七吟歌仙の発句である芭蕉の句は何を詠つたものであるか。万葉集に「我が行くは七日は過ぎし龍田彦ゆ

めこの花を風にな散らし」があり、又西行の山家集に「思ひやる高ねの雲の花ならば散らぬ七日ははれじとぞ思ふ」がある。鶴は一度下れば其の地に七日住むと聞き慣れているので七日と言ったのだと後の「俳諧一串抄」にある。龍田彦はあの有名な「ちはやぶる神代も聞かず竜田川からくれなゐに水くゝるとは」(在原業平)の哥の竜田川を望む小山にある龍田神社の神であつて風の神とされてゐる。先の万葉集の歌は高橋虫麻呂の哥であり、わたしたちの旅も7日とはかからないから、竜田の風の神様、龍田彦、どうか帰りに立ち寄るまでは、風でこの花を散らさないでという心である。龍田彦のいわれを説明すると聖徳太子までいきそうに切りがないので飛ばす。忠度都落の平家物語の段は私の高三の教科書にも載つていて、東大言語研究室所蔵の平家正節の写真を冒頭に貼り付けた下から下記のように始まつている。薩摩守忠度は、いづくよりか帰られたりけん、侍五騎、童一人、わが身とも七騎とつて返し、五条三位俊成卿の宿所におはして見給へば、「落人帰り来たり。」とて、その内騒ぎあへり、と続く文章に心わくわく読んだ覚えが蘇つた。門をひらかれずとも際まで近寄つて下さいと呼びかければ俊成卿はその人ならば苦しからず入れ申せと言つて門を開けて対面あり、そのさまはなんとなくあはれなり、と作者は

書いてゐる。忠度の言うには、先年歌の道について教をあなたより申し承つてから後は、おろかならぬ御事に思い参らせ候へども云々と莊重な候文が続く。生涯の面目に一首なりとも師恩を受けたいと思つていたけれども、すぐに世の乱れが起こつて、その命令がございませんとは、ただ私の一身の嘆きと思つております。世が静まりましたならば、勅撰のご命令がございましょう。ここにございます巻物の中に、ふさわしい歌がございませぬらば一首だけでもご恩をいただいで、私が死んであの世でもうれしいと存じましたならば、遠いあの世からあなたをお守りすることでしょう、と言つて普段から詠み置きなされた歌の数々の中で、秀歌と思われる歌を百余首書き集めなされた巻物を、今はもはやこれまでと思つて出発なさつた時、これを取つてお持ちになつたが、鎧の引き合わせから取り出して、俊成卿に差し上げる。これを見た俊成卿は感涙おさえがたいと返し、忠度は、今は西海の波の底に沈まば沈め、山野に骸を曝さば曝せ憂き世に思いおくこと候はずと馬に乗つて西をさして歩む。忠度は前途程遠し思いを雁山の夕べの雲に馳すと和漢朗詠集を高らかに口ずさみながら別れる。そして後、世が静まつて選ばれた歌が冒頭のさゝ浪やである。昔の都であつた志賀の都は、今は荒れてしまつたが、昔のままに

美しく咲いている長等山の山桜であるよという歌意である。長等山は三井寺の裏山に当り私はここで亀にであったことを覚えていた。志賀の都は天智天皇の天津の都のことで先に比叡山に登るバスが近江神宮の前を通りました。花咲いての発句は江戸の清風の仮寓におけるもので、桜の花が咲いて散るまでは七日だというし、また鶴も降りた場所に七日間留まるという。この清風宅に来てみると山の麓の庭園は今桜の盛りで、その間には鶴が舞遊びいかにも豪華な眺めだ。花七日というが、この眺めが七日楽しめるというのは素晴らしいという清風への挨拶なのである。それを左門宛て書簡に書いたのであった。この左門宛て書簡は岩波の書簡集（一九九三）には載っていないが、鳴海の富豪知足、法号が寂照との書簡のやり取りがあり、この中に戸田左門の名前がでてくるところから推測して、左門はこの時江戸藩邸に滞在していた所へ少し卑下した書簡を出したのであろう。忠度卿の歌の心を踏まえて桜と鶴の句をつけたのに芭蕉の心ばえがそこはかとなく感じられるのでこの書簡を私は信じてここに掲載した。

俳窓評論纂——啓泰誅他（・は更に選した句）

*青木啓泰誅の続きにて白金葭の啓泰句をぬいて見た。

花筏べつかんこの忿怒像（1号）

・犬ふぐり世の中捨てたものでない（2号）

みどりの日手演は片手にて済ます（3号）

・麦刈りにさそりのようなコンバイン（4号）

葭切と話してみてもまとまらぬ（5）

青野からきんちやく頭の孫が来る（6）

・やかんから水飲む二百十日かな（7）

爽やかに木魚叩かれ吐くものなし（8）

新海苔でくるみし飯のあふれおり（9）

つまずいて後振り向く厄落し（10）

ラ・マンマ歌はフランス鱈雲（11）

・建国記念日の切株で休む（12）

蜥蜴出づ背戸から畑に壺移し（13）

おぼろ月お前なんかにわからない（14）

・春の月卵の黄身のもりあがり（15）

チーズ引き地下のネズミも巴里祭（17）

天の川行ってみたいが暗かろう（19）

落花生本家のおやじが干している（20）

・稲架消えて稲敷郡に村一つ（20）

叔母を訪う新利根川の初時雨（21）

ちゃんちゃんこ着ててきばきと蓮出荷（22）

初日の出不可抗力があるらしい（23）

- 騎士のように泳ぐ鱻見し月夜 (24)
 ・春の水せせらぎに出て速くなる (25)
 仁王門枝垂桜に囲まれる (26)
 ・夜蛙に囲まれ居酒屋騒ぎ出す (27)
 桜桃忌商店街は斜陽である (28)
 黴臭き蔵は今でも舟を吊る (29)
 天の川佐渡の真下で鰯が釣れ (30)
 十五夜の団子いくつがいびつなり (31)
 ・飲み友の蛙のような太い喉 (32)
 ・柿食って正倉院の戸籍かな (33)
 刻み葱たつぷり入れて蕎麦の湯気 (34)
 初詣氏神止りで引き返す (35)
 石岡の鐘下ロウボーが寒そうだ (36)
 春の水芹を育てて澄みにけり (37)
 花の山たつた一組花囲み (38)
 ・六波羅へ行けと鳴き出す雨蛙 (39)
 垂乳根の母の軽さよ蚊帳捨てる (40)
 ワイシャツで駄を下りゆく半夏生 (41)
 宵の闇厩舎平らに馬眠る (43)
 ・羽根になる無患子もある臨濟宗 (44)
 ななかまど女化粧荷の刃物売り (45)
 銀行員等銀河のような眼鏡かけ (46)
- 初詣まつすぐ帰り雑煮椀 (47)
 墓参りケツキョと背後で鳴く日なり (48)
 蓮の根を遺骨と見る程馬鹿でない (49)
 声と顔一緒に出して花の山 (50)
 おれらしくない薔薇活け刺そのまま (51)
 田の神はいつ来て帰る蟾蜍 (52)
 ・ほおずきが宅急便で朝届く (53)
 市と村の境で会へる辛嵐 (55)
 落鮎は川の神様銀河色 (56)
 ・空つぼの栗の毬から虫の顔 (57)
 蓮田中自分で引っぱる田舟かな (58)
 除夜の鐘いくつ残して眠りたる (59)
 ・いぬふぐり売物件で咲いてゐる (60)
 眉剃ってバレンタインの女かな (61)
 土のない野菜ばかりや道の駅 (63)
 水番の見廻り小型トラックで (64)
 ・青嵐病院食に芋が出る (H28) 6.3
 針箱に針を探すや台風圏 (68)
 ・さじで食う栗の中身は月の色 (69)
 火の見から鐘が下され雪が降る (71)
 見当で投げた達磨のどんど焼 (72)
 ・杉花粉山から天狗が飛んでくる (73)

啄木忌常磐線のホーム混み (74)

水鏡飛行機がゆく鮫のように (75)

田一枚植えて出て行くトラクター (76)

外厠嘆きの壁は葎簀張り (76)

森林浴点滴余韻の睡魔とも (77)

・秋鯖を見るだけ見てくる那珂湊 (79)

蒔かぬのに今年も咲きて白朝顔 (80)

以上平成二十九年十月号 (80号) で投句は終わった。

印句は今も佳句と思われた句である。私とは十五年間の俳友であった。葎の会の後半私が啓泰さんの句をよく鑑賞するので、初期の句集までお送り下さった。それは昭和五十六年の青木啓泰句集であり、八幡船・暖流・旗・歯車の四結社の中から選んだ俳人の句集であった。当初作品は先にあげた「水ぬるむ小川の岸でせりをつむ」であって、昭和三十年四月俳句入門第一声というまえがきが付いている。私は中一であつたが啓泰さんは中三、十五歳にこういう句を作られたのである。「試験前筑波に雪の残りおり」「冬服に東京句わせ慶子来る」「就職期鼠穴を覗いてばかりいる」「肺患といわれ寒い石につまずく」「ボルネオの沖へ沖へといんき壺」など啓泰代表句が載っている。萱の十五周年俳句大会に神楽坂の出版会館まで江戸崎からお出でになり、写真を撮るとさっさと帰ら

れた。みちさんがエレベータまでお送りした。それは平成24年(二〇二二)六月十五日のことであつた。その月の十六号には欠詠、時々そういう月がありました。毎月投句原稿と料金を入れた封書が届き、会報をお送りしたので啓泰さんの生活ぶりは大体分かつていました。最近茨城新聞の川柳欄の選者になつたとそのスクラップも送って下さった。新年会の会食には江戸崎からお出で下さいました。その時はよく喋られました。私はその内容はよく覚えていません。みちさんの言うには最近ホトトギスにも投句しているんだよと言われたとか、これは私の芭蕉の文章に触発されたのかしらと思つた。もつと俳句談義や文学論でもしたのですが、対話はあまりされなかつた。以前自分のことを滝春一門下、無季容認十七音基準律です。入信が口語自由型(鈴木石夫)ですので、これが体質ゲノムに合っているようです、と告白されていますので、それ以上申上げても詮無いことですが、もし牛久出の高野素十門とかあるいは山口誓子門とかあるいは加藤楸邨門とかに入信していたらどんな啓泰さんになつていただろうかと思ひます。才能のある人は十代での師が大切だと今更ながら思うところ。そう思つて伝統的な俳句を作るホトトギスにも投句して自分を慰藉してはいたのではないのでしょうか。また私の穿

鑿癖が出て、誄にならなくなりそうですので、ここらで啓泰誄をお終いにします。合掌。

*朝日1028に一面使いカラー写真付きの源氏物語五冊目の「青表紙本」「若紫」定家の探求 など見出しの多い記事が載った。源氏物語の紫式部の書いた原本は残っていない。残っているものは皆人の写本で伝えられてきた。鎌倉時代になると藤原定家が様々な写本を比較しより正しい本文を追求し復元されたものが「青表紙本」と呼ばれ、これが室町時代に書写されて「大島本」となりこれが今読んでいる源氏物語の原型になっている。大島本と定家の青表紙本とを比較して山本淳子教授が解説しているが、若干の差異があるので、今の若紫は今回の青表紙本つまり定家本に基づいた文章に変わるかもしれない。最近読んだ柏木の最後が「這ぬざりなど」で終わっている。この尻切れトンボのような終わり方について私は教室で質問したが、納得のいく答えは得られなかった。これは定家が後の文章を削除したのだという1024の藤本孝一氏の見解が載っていた。私はこれで納得がいった。薫がハイハイなどしてもあそんだという河内本や別本の余韻のない表現をばつさり削ってしまったのだ。定家本は源氏物語の鎌倉時代当時の読書用の語訳なのだ。

*1020朝日歌壇の時評に「歌は人」でいいのか 松村正直が載った。「作品は作品として自立しているのであつて、作者の人生と関係ない」という考えと「作品と作者は不即不離の関

係にある」という二つの考えがある。前者に賛同して来た歌人が歳を重ねて、歌集を読んで歌人像が浮かび上がってこないのは何かが不足していると考えようになった、と言い歌集の略歴には作者の生年があつた方が良いと論じている。後者の考えは島木赤彦の「鍛錬道」や土屋文明の「生活即短歌」など近代以後ずっとあるものだ。論者はもし単に年齢を重ねることで伝統的な考えに戻つただけなのであれば、少し淋しいと思うで結んでいる。これを俳句に置き換えてみると、私は両方の考えで作句すれば良いと思う。そこで芭蕉の日々新たなりが浮かぶ。軽みが浮かぶ。それが大変参考になると思う。即ち歳を重ねると俳人は生活即俳句になると思う。歳と共に日々新たに又新たにと前進すればいいのだ。

*1030の朝日インタビューに再びマルクスに学ぶ 気候変動や格差 資本主義の代償だ 若者たちは訴える の見出しで大阪市立大の斉藤幸平准教授の考えが載った。生態系が崩壊しようとしている 行動を怠る大人は悪だ と訴えたグレッタ・トゥンベリさんの国連でのスピーチが世界で共感を生んでいる、から始まって彼の経済思想を述べている。新しい経済のありようを見出す鍵はカール・マルクスの資本論だとも。この理由をインタビューされている。世界全体の富を独占する一部から再配分をすればいい、人間の生活の本質は『自然との絶えざる物質代謝』にあると考えていたのがマルクスでグリーン・ニューディールがその答えだと。

*日展の招待状が届いたので今年も恒例のように六本木に行つて仲間と作品を見て回つた。郷里の竹工芸作家の門田祐一君も最近入選するので上京する。彼は米国での個展を終えての出品であつたとか。大阪の加納綾女さんも上京して彼らの作品を鑑賞した。三原君の荒磯海の絵、門田君の作品、それに松岡高則氏の木彫の童女を見て、祐一君の案内で竹橋の近代美術館工芸館に移動して、竹工芸名品展を見た。ここで書く目的は、色々の分野の作品があるが、それに毎年新たに、新味を出すのがいかに難しいかということを感じたからである。私の穿鑿癖のせいかも知れないが、先走つて言うと、年々歳々同じようなモチーフの作品を作つて自分に飽きないかということである。これはみちさんが帰つて来て見付けたことだが、松岡さんの童女の木彫は先年上野で見たバルチユース展の少女の絵にそっくりである。バルチユースのは両手を頭に結んで目を瞑つている。こちらの方がずつといいと言つた。私もつくづく見たがその方がいい。分析的に良さを言いたくない。一方的に批判的なことを書くのも控えよう。只考え考えていくと、私には芭蕉の言葉を読み止めた土芳のあかさうしの言葉が私の胸を打つ。心を打つ。「師の風雅に萬代不易有。一時の变化あり。この二つに究り、基本一也。その一といふは風雅の誠也。不易を知らざれば實に知れるにあらず。……と続いて、不易は变化流行しても誠によく立ちたる姿、代々の歌人の歌に变化があるも今見る所昔に見たものに変わら

ずあはれなる歌が多い。是を不易と心得よ。また千変万化するものは自然の理だから変化に移らざれば風あらたまらず。この変化に押し移らないものは一端の流行に口先が時を得たばかりであつてその誠をせめざる故也。せめず心をこらさざるもの、誠の変化を知ることなし。唯人にあやかりて行ふのみ也。せむるものはその地に足をすへがたく、一步自然に進む理也云々と私の訳文込みで書いてみた。この少し後に松の事は松に習え、竹の事は竹に習えと師の詞のおりしも私意をはなれよという事也が出て来る。まただいぶ後の新しは俳諧の華也が書かれ、新みは常にせむるがゆへに、一步自然にすむ地より頭るゝ也、とありその後には俳諧の作り方の肝心なことが出てくる。文芸と絵画工芸彫刻などは違ふと言われそうであるが、ちつとも違わないと私は思う。風雅の誠を尽すのだから。生々流転するのは不変であるという不易流行を内に包みもつた心が風雅の誠なのだ。現代の科学を援用して理解すると、ビッグバンによつて出来た宇宙がどろどろの混沌とした世界から万物がうまれ言語によつて名を持ち存在となり**もの**が出来たのだ。この辺のことをわかりやすくここに書くのは難しいので、今書き継いでいる芭蕉の軽みの文を読んでくだされば、それが言語とか絵とか彫刻とかの表現ではなく、造化を生きたことそのものだと思つてくると思ひます。あまり書きすぎたら失礼かと思いますが、私はピカソやゴッホが

いかに己と闘つてその個性を得たかそれが万人の共感を得ているのだと思います。

お便り広場

秋冷の候ますますご健勝の事と存じます。先日改組新第六会日展入選の通知を頂きました。これもひとえに皆様の応援のお陰と感謝致し厚くお礼申し上げます。今年の日展作品制作中にアメリカサンタフェにて個展を行い十日余り抜けたため作品完成が危ぶまれました。念願のサンタフェの個展は盛況でした。二〇〇二年グループ展二〇一〇年の親子展に次ぎ今回は個展、心配しましたがアメリカの皆さんに私のバンブーアートを楽しんでいただけました。で安心すると同時に今今後の作品作りの励みになりました。時節柄、ご自愛ください。

(102門田祐一)

先日の豪雨被害はなかったのか？最近日本列島自然災害がほんとに多く発生しますね。科学の発達した現在防ぎようもないというところか？地球温暖化のせいか？神無月もと二日來月は霜月に入ります。白金霞102号受け取りました。最近何か忙しくして返事書くのも遅くなりました。庭木の剪定ずうーとやつています。友人が通りかかり健三さん高い処止めとけと心配してくれます。木犀バベかいづか等々大変だ。松が二本あるのが特に大変だ。足場をしつかり作つてやらないと転落の危険あり根本から切つて数を減らすこと必要若い時自分が植えたものばかり植物の習

性で年がたてば大きくなつて背丈が高くなり手におえなくなつてしまふ。職人を頼む(ば)良いがそれほどのものでもないどうするか悩んでいます。川越も浸水したと報道していたが拓也の処大丈夫だった？家のことばかりいくらやつてもきりが無い適当で止めること。「剪定をしようか切るか庭の松」木犀を丸形止めて背を低く、手紙を書こうと思つても漢字が思い出せない。字が早書きで少し字が乱暴になる歳のせいで仕方がないか以上御礼までご判読ください。

(102健三)

(漢字を思い出しながらこれだけ書けるのだからたいしたもんですよ。お子達に頼んで電子辞書を買つて貰い、手元において書けば楽です。難しい漢字は先に差し上げた漢和辞典を引けばよろしいですが、電子辞書にも搭載してありますのでこれも便利です。子たちとの連絡はスマホでラインというメールで即座にできます。今更と言わずこれからはそういう文明の利器を使えばいいのです。それから、松の剪定など通りがかりの友人が言われるように植木屋さんに頼んでやつて貰ってください。当地でも転落事故や耕耘機に巻き込まれて死んでいたという話を聞いたことがあります。また甥に以前言った事ですが、生家の跡に松を植えて元の松山に復元するように頼みましたがナシのツブテです。兄さんからも言つてください。高志)

昔の秋とは思えない秋にそれでもやつとなりました。十月号頂いてより多忙でお便りも失礼しており。十一月明日は昔の明治節バタクしてる中にもう二ヶ月足らずで事多かつた令和元年も終りますね。暑い頃から身辺多事すぎて私にとつて令和は厄年です。東京クラブは台風で十月例会は

取りやめ久々の十一月句会を迎えます。今更ながら被害
が、千葉県はまさかの大災害でまだ大変被災の皆様を
思うと心が痛みます。白金葎十月号の私の好みの御句を
記します。先生の「鶏頭の」ほんとうにいかんせんです。タ
ネはシワくの下につくのですね。これも不思議。みち様の
「切株の上に置いた方を偲ばれます。陽一様の二本脚」ま
さにカラスの姿そのもの、カラス好きとしては嬉しくなりま
した。やつと新しくなった家電製品にも馴れましたが、説
明書もなかく解りにくい面もありで、猫を気にしながら
身辺に電話の子機を置いたり、冷蔵庫も冷凍室野菜室の場
所が変わったりで習慣というものは身につけてしまうのだと
つくぐ思いました。今日は何をしようかしら、と考える日
はいつ来るのか来ない中にサヨナラかのどちらかでしょう。
あたゝかすぎる秋も急に寒くなるかも知れません。どうぞ
早朝の太極拳も結構ですがこれからは風邪にお気をつけて
くださいませう。ごきげんよう。

(112 長屋璃
子)

みち様 お元気でお忙しくおすごしの御事と存じ上げま
す。すぐに御礼と思いつく思うにまかせぬ毎日でこんなに
日が経ちお詫び申上げます。山種美術館で私のためにわ
ざぐお買い上げ下さいました早速御舟の「翠苔緑」の紙バ
サミ(何と云うのでしたら)びわの実の下の黒猫ちゃん大好き
大好きとてもいいもの戴きすこしく嬉しく何度も眺めては

自然にニコクになつていきます。いつもくお出先で楽しいもの
頂きうれしくも申し訳なく私には何か買って下さることな
どご放念そのところどころ楽しんでくださいませう
願つております。いつおめもじできるかも知解らない日を楽
しみにしております。御礼迄これからは風邪が大敵ご注意
を。

ごきげんよう。

(112 璃子)

先日はお忙しい中お出かけ下さりありがとうございます
た。毎年熱心に私の作品を鑑賞して頂き、作者者として嬉
しい限りです。皆さんの作品を見る目が年々肥え、私にと
つてはこの上ない刺激になつていきます。いつの日か胸を張つて
作品を解説できる事を夢見て精進します。同梱の柿は我
が家に実った西条柿をドライアイスで渋抜きしたものです
少しですがご賞味ください。

(118 祐一)

菊薫る十一月。お元気で過ごして下さるか。白金葎十月号
有難うございました。千葉県の方には度々の台風や豪雨で
たいへんな被害がでているようですが、お変わりございません
か。私、俳句歳時記一冊買いました。俳句初心者で季語が
たくさん載つていて勉強になります。送っていただいた本を
読んで俳句を詠んでみましたので添削をお願いします。山
種美術館に行かれたのですか。絵、ガキ有難うございま
した。インターネットで調べてみました。よかったです。寒く
なつてきました。ご自愛ください。(以下略)

(119 昇)

(みちさんが手紙を書くそうですのでよく読んで下さい。それから
ITが使えるのなら、電子メールですべて出来ますよ。高志)

光成高志様 みち様 あまりの猛暑と台風十九号で東京クラブ例会は令和元年二回休会でした。若くはない人達の集まり大事をとるにしきはなしです。こゝへ来て急に周辺が秋色に満ちてきました。町を歩いていても櫛の落葉の早い木遅い木、紅葉黄葉今のこの時沢山の目の楽しみがあるのにスマホ歩行貧しいです、ね。(立冬すぎても秋色も変ですが)自然に恵まれ水辺も見られ我孫子の今美しいでしょうね。十七才の私の猫が突然死にました。姉が逝って七回忌を過ぎやつと私と一緒に寝るようになり自分を人間と思つていろいろな日常でした。元気な時は猫俳句もよく作りました。死んでしまった今作りたくありません。「こたつ開きをしてやれず悔いが残ります。寒さに向かいますくお体に気をつけ下さいませよう願つております。ごきげんよう。(113)璃子

お父様お母様お元気ですか。←載せないでね(以下略)

(113)晶子

大分寒くなりましたが、御清吟の事と存じます。今月の句会、今年で最後となる大學のクラス会とかち合つてしまいました。残念ですが欠席します。(以下略)

(113)孝三

高ちゃんお元気ですか?毎日の様にテレビで千葉の被害を見えています。千葉県は大変ですね。我孫子市の被害は聞きませんのでホットしています。気をつけて下さいネ。先日の同窓会の写真を送ります。久々の出会いに皆中学生になった気分楽しく過ごしましたよ。次回は高ちゃんも是非参加して下さい。お互い元気で出会い出来る日を楽しみに

していますよ。敏子さんにもよろしく伝えて下さい。(115)ミサ子
(写真見ました。虫眼鏡でよく見ると面影があつて名簿と合わせて思い出しています。名簿の川柳は下江君の作でしょう。高志

句会のあと愚妻下命の買い物を買わせて帰宅しました。

(中略)今月は不便なコピアンでの開催で、投句一覽表の筆記コピーと主宰にたいへん御苦労をおかけして申し訳なく思っています。正直のところ粗忽で頭の回転が遅い私には選句にあたり一覽表は非常に有り難いのですが、主宰に余計な負担をかけるのは心苦しく、悩ましいところです。主宰選定の兼題で「吹越」など珍しい季語を初めて知つたのも初心の者として有り難いことでした。もちろん当季雑詠で季節だけ限定して題材は自由という今のやり方の良さも充分にわかっているつもりです。良い句に出会つて句友と熟読玩味する喜び。ほんとうに我らが句会はいいですね。充実した内容の会誌「白金葎」を遅滞なく送り出す主宰の敏腕さにも毎月脱帽しています。

(115)健二

高志様、みち様 真夜中になり、はて、今月の白金葎は?と、昨日だったことに気がついて愕然としました。欠席するつもりではなかったので御知らせもせず本当に済みませんでした。昨日は何をしていたのか、と考えてみると、いつも出品しているポーランドの版画展の締切りが迫っているのに朝になつて気がつき大急ぎで荷造りをして郵便局へ送

りに行き一日が過ぎたのでした。来月はじめの個展の準備もしています。俳句の方はおろそかになつて居るかも知れません。最近の迷句、菊の香も醒むるに足らず昼眠し、とりあえずお詫びまで
(1116 陽)

故青木啓泰氏への追悼記の最終篇を今月号で読むのを楽しみにしています。啓泰俳句の個性と土着性の鮮やかさには痺れます。一句鑑賞を送りますので宜しくお願ひします。
(1117 健)

光成様今回のメインの用件は根本さんの句が朝日俳壇に掲載されたことをお知らせしたかったのです。(中略)私は七十八歳となりましたので、残りの人生、俳句もやつてみようと思つています。俳句の会に属さずに自由な立場で続けるつもりです。(以下略)
(1114 土屋健)

我孫子日記

10/18	例会
10/19	ACC
10/22	豊島区
*1	10/30 SOA
11/1	例会
*2	11/5 日展・工芸館
*3	11/9 北総病院 ACC
11/10	例会
*4	11/13 恵比寿・神谷町 SOA
11/15	例会

*冷ましき祝砲とんと鳴る日なり

*う竹工芸籤の集白雲の形

円空仏ならで童女の鑿の痕

日展のモデルは自分。エロの絵(みち)

親王の騎馬像仰ぐ秋高し

*3 山法師紅葉を凝らす東口

*4 版木彫刻者に戸山光成ピラカンサ

集古館へ白山茶花坂がかり

頼朝の主従の屏風絵を見たり

蕪村の桃李園図見る冬初め

編集後記

今月は都内へ四回出た。ACC、即位礼正殿の儀の日、日展初日、それに祝賀パレードの日。上の日には大嘗祭の話しを聴いた。一日には日展と工芸館にて竹工芸作品を見た。祐一君の個展作品と竹橋で見た門田筆玉作品を並べて表紙に掲載した。両氏は父子であつてお父様は一〇三歳の作家なのだ。これらの作品を見る前に篠原幹夫君から仏像彫刻の写真集が送られて来ていたので、これも含めて懇談した。私はどうしても芭蕉に仮託して作品を見てしまう。軽みのある作品になっているかを見てしまふ。建築で云えば日光東照宮と京都の桂離宮を思う。梨子地の器に高時絵描きたるものはそれなりに美しいが、長く見ているとこれに飽く。広く云つて、芸術に古人なし、只後世の人を恐る。日々流行して日に新たに又新た也、この故に古人なし、に等しいのだ。こういう芭蕉の言葉はほんとに元氣が出る言葉だ。

白金霞十一月号(通巻第一〇三号)令和元年十一月十八日発行

編集・発行人 光成高志 一七〇・一一二九我孫子市南新本二二四二七

表紙の題字・加納綾女 写真は十一月十七日の白金霞